

## 製造業におけるイネーブラーの台頭

イネーブラー (Enabler) とは、辞書を調べると「ある事象の成功・目的達成を可能にする人・組織・手段」と書かれている。ビジネスの側面では、「あるコア技術やデバイスを持っており、新たな社会システムを構築する上で不可欠な企業」と言い直すことができる。イネーブラーという言葉は、情報通信業界では欧米中心にこれまでも使われてきた。情報通信業界自体、ネットワークを基本としているので、その重要構成要素を担うという意味でイネーブラーという言葉の親和性が高かったのだと思う。

現在の製造業が置かれた環境を考えると、情報通信業界で起きたイネーブラーの台頭が製造業でもさらに進むと予想される。理由として IoT (機器ネットワーク) という大きな流れがある。あらゆるモノがネットワークにつながり、社会システムの一部を担うようになる。この社会像は、あらゆる国がビジョンとして掲げている。日本の Society5.0、ドイツの Industry4.0、中国の中国製造 2025、いずれもネットワーク化された社会において、省人化、自動化、ネットとリアル融合、などをターゲットとしている。

では、このような社会が簡単に実現するかといえば、それほど簡単ではない。そこにはコア技術やコアデバイスが不可欠になる。例えば、自動運転社会や遠隔医療といった言葉を考えても、必要な技術開発は数多くある。このような新たな社会システムを構築する上で重要な技術には投資も集まる。既に有名になったが、米国 Intuitive Surgical 社はダビンチというロボット医療機器のみを開発・生産する企業だ。同社の技術は膨大な手術をデータベース化することで医師の外科手術をガイドすることや、遠隔地から手術をアドバイスすることなど広がりを持つ。いわば遠隔医療時代の重要デバイス・技術を担う。同社の時価総額は 10 月時点で 600 億ドル (約 6 兆円) を超える。日本の上場企業で 6 兆円の時価総額を持つ企業は全業種あわせても 10 社ほどしかない。ロボット医療機器の数ラインアップしか持たない企業にこれだけの価値を市場が見いだすのは、まさにこれからの社会システム上、不可欠なイネーブラーだと考えられているからではないだろうか。

Intuitive Surgical 社に限らず、社会課題にあわせ一点突破型で技術開発をする企業は多くなってきた。このような企業は世界中が求めているし、資本市場から資金を集め一気に技術開発を進める。このような状況下、新規参入を考えている企業にはチャンスが広がっている。上手に社会課題と特定技術をつなげることができれば、世界中の IoT に組み込まれる。一方で、既存製造業にとっては開発、事業のポートフォリオを見直す時期に来ているともいえるはずだ。大企業ほど事業範囲が広く、開発リソースが分散してしまいかねないからである。新規・既存、双方の製造業ともに、今後はより自社の強みを生かし、集中した開発・事業化が求められるのではないだろうか。

株式会社 野村総合研究所  
コーポレートイノベーションコンサルティング部長  
小林 敬幸